

複合名詞の語構成

——「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞¹を例に——

王 鑫

キーワード：複合名詞、自動詞、意味役割、語構成

要 旨

本稿の考察対象は現代日本語の「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞である。この型の複合名詞における前部要素と後部要素の多様な結合関係に注目し、まず、複合名詞をモノ類と行為類に分ける。そして、ガ格の格関係の有無とガ格の表す意味成分が複合名詞にどのように関与しているかによって、モノ類を「主体が出現するタイプ」「主体が隠れるタイプ」と「主体が関与しないタイプ」に分ける。さらに、動詞の表す動作・状態の内実注目し、ガ格の格関係が成立しない類を「道具」「産物」「定着」に分けて考察した。行為類に関しては、二つの行為の意味関係によって、「行為の中の行為」「独立した行為」と「働きかけ」に分ける。最後に、各分類の特徴と「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞の全体図を示した。

1. はじめに

「動詞連用形＋名詞」型複合名詞は語例数が多く、日本語の複合語を構成する上で、重要な一種である。また語の意味は、結合する前の動詞と名詞より、比較的容易に推測することができるため、高い生産性を見せている。しかし、(1)が示すように、

¹本稿で言う「動詞連用形」はあくまでも「動詞に由来する」という意味である。名詞のように働く動詞連用形は一つの分類のタイプとして整理する。後部要素の名詞に関しては、意味上独立した意味を持つ接尾辞・造語成分の一部が含まれる場合がある。(例：～にん・じん人 など)

同じ「動詞連用形＋名詞」という構成をとるとはいえ、前部要素と後部要素の結合関係は実に多様なものである。

(1) 歩きスマホ、空き家、乗り気、逃げ恥

本稿はこのような構成をとる複合名詞における前部要素と後部要素の多様な結合関係に注目し、「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞を対象に、用例調査を通して、その結合パターンを抽出し、意味関係を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

「動詞連用形＋名詞」型複合名詞の語構成に関する先行研究は多数存在している。整理すると、以下のようなものがある。

(ア) 意味論的観点による分類

① 意味役割分類——石井（1986）

② 事態類型分類——野田（2011）

(イ) 構造論的観点による分類——奥津（1975）、沖（1983）

(ウ) 動詞に注目した分類

① テンスによる分類——鄭（2012）

② 動作性の有無による分類——金（2016）

本稿は複合名詞の意味に注目して、考察を行う。複合語の意味について、湯本（1977）、影山（1993）、石井（2007a）などの先行研究は、複合語の意味は構成要素の意味から導かれる「くみあわせ」的な性質と構成要素の意味から直接に導かれない「ひとまとまり」的な性質を持っているとしている。本稿もこの立場を取り、構成要素の意味関係を分析するとき、主に「くみあわせ」的な性質に重点を置き、分析を行う。

次の2.1節と2.2節では、本稿の研究にとって特に重要となる、意味論的な観点により分析を行った石井（1986）と野田（2011）を紹介する。

2.1 石井（1986）

石井（1986）の考察対象は和語他動詞語基を含む複合名詞（学術用語）である。この型の複合名詞は、主要成分で終わるタイプ（「編み針」「くぎ打ち機」「さび落と

し棒」など)と動詞成分で終わるタイプ(「くず入れ」「コンクリート打ち」「アニリン染め」など)に分かれる。石井は1954年から1981年文部省編『学術用語集』23編より、和語他動詞性語基を含む複合名詞1245語を集めた(「V+V」型複合名詞を除く)。そして、構成要素がそれぞれ複合名詞の中で、どのような意味成分を担っているかに焦点を当て分類を試みた。

石井(1986)は、まず、収集した用例から和語他動詞性語基と他語基の意味関係を抽出し、意味成分を動作の対象・結果対象・手段・主体・場所・起点・通過点・着点・目的・結果・時など15種類に細分した。各意味成分がどのように結びついているかを調べるため、意味成分の配列順序を整理した。

次に、106個の異なり和語他動詞語基の意味的な特徴と名詞との関係から、動作のモノに対する働きかけをモヨウガエ、フレアイ、トリツケ、トリハズシ、ウツシカエ、クミアワセ、ツクリダシの7種の動作成分に分類した。それぞれの動作成分がどのような意味成分と結合できるかを分析した。

さらに、他動詞語基以外の異なり727語基について、意味カテゴリーを与え、それらと意味成分との間に意味的な対応関係があるかを分析している。石井(1986)は意味カテゴリーを自然物・食品・道具・薬品・機械・資材・容器・建物・形状・数量・動き・状態など22種類に指定して考察を行った。その結果、意味カテゴリーと意味成分の対応関係が認められた。例えば、自然物は〈対象〉と、道具・薬品などは〈手段〉と、機械は〈主体〉と、数量・動き・状態などは〈様態〉と対応することが多いと指摘している。(石井1986:p.105)

最後に、石井(1986)は、「切り」という和語他動詞語基を持つ複合名詞の用例数が非常に多い(44例)ことから、「切り」を取り上げて考察した。

2.2 野田(2011)

野田(2011)は「他動詞連用形+具体名詞」型複合名詞の多義的な語構成に注目し、構成要素間の関係の多様性を包括的、体系的に分析したものである。Yahoo!辞書、Google検索、『新潮文庫100冊』から収集した367の用例を意味の共通性によって、7種類に分類した。以下はその一部を抜粋したものである。

(ア) 行為主体による、後項要素が表すある存在物に対するある行為が実現した結果として完成する(もしくは生じる)存在物。(ア)の例として、「和え物」

「揚げパン」「書き物」「巻き髪」「ゆで卵」「煮物」「干し葡萄」「忘れ物」などが挙げられる。

(野田 2011 : p.4 (1))

(イ) 行為主体による、ある存在物に対する何らかの行為が実現した結果として生じる、後項要素が表す無生物。(イ)の例として、「揚げカス」「押し絵」「切り屑」「吸い殻」「蒸しパン」「寄せ鍋」「煮汁」「ちらし寿司」などが挙げられる。

(野田 2011 : p.4 (2))

野田 (2011) は、「他動詞連用形＋具体名詞」型複合名詞はモノを表すタイプと行為を表すタイプ、またはモノと行為両方を表すタイプに分類できるとしている。そして、分類に基づいた用例の分析を行い、「動詞連用形＋具体名詞」型複合名詞の特徴を考察した。

例えば、モノを表す「動詞連用形＋具体名詞」型複合名詞の特徴の一つとして、「切り屑」「吸い殻」など、行為の対象が複合名詞の構成要素として言語化されず、この対象物に関する情報は百科事典的知識によって補われるというタイプの複合名詞が多いといった特徴を挙げている。また、「置手紙」「打ち水」など行為を表す複合名詞は行為主体から対象への働きかけが、その行為の完了後に対象がもたらす何らかの効果や影響を意図したものであることが多いと述べている。(野田 2011 : pp.5-8)

2.3 石井 (1986) と野田 (2011) の課題

石井 (1986) と野田 (2011) などの先行研究は研究の目的やアプローチの仕方によって、意図的に「他動詞連用形＋名詞」型複合名詞の一部に限定して、用例を収集し、考察を行なっている。しかし、「動詞連用形＋名詞」型複合名詞の全般の構成を明らかにしたいという目標を掲げる者からすると、もう少し範囲を広げて用例を収集する必要があると思われる。このような出発点から先行研究の問題点を指摘すると、石井と野田などの先行研究は用例の収集、または、考察の視点に一定の偏りが見られ、そこで得られた結論は「他動詞連用形＋名詞」型複合名詞の全体に広げられるのかどうか疑問が残る。

例えば、石井 (1986) は和語他動詞語基を含む複合名詞を考察したが、用例はすべて「学術用語」である。「学術用語」は 3 単位語、4 単位語などの高次結合語が多く、一般語とは異なり、特別な性格を持っている。一つの例を挙げると、石井 (1986) の

用例に、〈動作主〉という意味成分が複合名詞の構成要素に現れた用例は見られない。「学術用語」で得られた結論のどの程度が一般語に応用できるか疑問に思う。

また、野田(2011)の考察対象は「他動詞連用形+具体名詞」である。「あおり運転」「駆け込み乗車」「作り話」などのような後部要素がサ変動詞の語幹或いは動作性名詞である例や、「売り気」「書き言葉」のような抽象名詞である例は考察の対象とされていない。本稿はこれらの用例も視野に入れ、「動詞連用形+名詞」型複合名詞を整理したいと思う。

さらに、複合名詞の語構成に関する先行研究は盛んに行われてきたが、「自動詞連用形+名詞」型の複合名詞の語構成に特化した研究は管見の限り見当たらない。このような事情を踏まえ、本稿では、これまで研究が手薄だった「自動詞連用形+名詞」型の複合名詞に焦点を当て、用例をできる限り網羅的に収集して分析を行う。

3. 用例収集

3.1 用例データベースの作成

本稿は『日本語基本動詞用法辞典』が収録した 230 個の自動詞を自動詞調査リストとした。それぞれの自動詞の連用形を『三省堂新明解国語辞書第七版』とウェブ辞書『コトバンク』から収集する。さらに、辞書では立項されていない用例を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『筑波ウェブコーパス』から収集する。収集した用例の数は 1520 例になる。

3.2 考察対象となる用例の選定基準と用例の意味範囲の指定

以下のようなものを考察対象から除外する。

- (ア) 語源不明、語源に定説がない用例。(当たり前、一説「当然」の誤表記によるもの)
- (イ) 当て字、忌言葉など歴史的変異、宗教上の考えにより生まれた用例。(当たり前鉢)
- (ウ) 現在日本語の動詞の用法から、動詞の意味の縮小・消失により意味の推測が不可能、またはかつて表記のゆれが存在したものが片方に落ち着くと見られる用例。(合方→相方、合席→相席)
- (エ) 固有名詞の中の商品名、作品名、地名など。
- (オ) 動詞連用形として捉えられないもの。(光通信)

また、一部の用例は複数の意味を持つ場合がある。本稿の考察対象となる用例の意味は以下のような条件を満たす必要がある。

- (ア) 前部要素である動詞連用形と後部要素である名詞の意味がそれぞれ独立している。且つ両者の間の文の想定は可能で、意味理解に支障を来さないこと。
- (イ) 専門用語的（固有名詞的）な用法でないこと。

4. モノおよびその周辺の VN 型複合名詞の意味構成

本稿は「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞は以下の2種類に分けて考察する。

- (ア) モノ、またはその性質や様態を表す類。
 - (イ) 行為・出来事を表す類。
- それぞれの類を4節、5節で紹介する。

4.1 モノおよびその周辺の VN 型複合名詞概観

西尾（1965）や奥津（1975）などの先行研究は複合名詞の構成を「文の凝縮」または「連体修飾構造の凝縮」として捉えることができると指摘している。本稿が収集した用例から見ると、その多くは、先行研究の指摘したように、前部要素と後部要素の間には何らかの修飾の関係が存在することが分かった。

このような先行研究で得られた知見を参考に、本稿は、まず、前部要素と後部要素との間に格関係の有無を確認する。そして、前部要素と後部要素の間には、ガ格の格関係が存在するかどうかによって、「モノおよびその周辺」の類を二分する。また、「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞におけるガ格は動作主と変化の対象という二つの意味成分が含まれる。本稿はこの二つの意味成分を合わせて「主体」と呼ぶ。「主体」が複合名詞の構成にどのように関与しているかを「主体の関与度」と名付け、「主体の関与度」とガ格の関係を以下のように整理できる。

- (ア) ガ格の格関係が成立する類
＝「主体が出現するタイプ」
- (イ) ガ格の格関係が成立しない類
＝「主体が隠れるタイプ」＋「主体が関与しないタイプ」

以下は、用例を交えて、「主体の関与度」に、「動詞の表す動作・状態の内実」という視点を加え、(ア)と(イ)の類をそれぞれ4.2節と4.3節で詳しく見ていく。

4.2 ガ格の格関係が成立する類

4.2の類は、以下のような用例がある。

- (2) 空き巣、立ち木、浮草、枯れ枝、乾き物、濡れ縁、曇り空、壊れ物、流れ星、落ち葉、鳴き鳥、住み人、泣き女、走り馬、渡り者、生き馬、働き人、湧水

(2)の例のすべてが前部要素と後部要素の間にガ格の格関係が成立することが観察できる。これは後部要素の名詞の表す事物は前部要素の動詞の表す動きをしている、または前部要素の動詞の表す状態にあることを意味する。例えば、「流れ星」の「流れる」は「星」の動作であり、「立ち木」の「立つ」は「木」の状態である。いずれもガ格の格関係が成り立つ。名詞と動詞の特徴から見ると、後部要素が「枝」「星」などの無情物を表す名詞の場合、「枯れ枝」のような状態変化と「流れ星」のような位置変化などの用例が見られて、すべて変化の対象を表し、前部要素の動詞は非対格動詞がほとんどである。一方、後部要素の名詞が「鳥」「女」のような有情物を表す名詞の場合、名詞の表す事物はすべて行為の動作主であり、前部要素の動詞が非能格動詞に集中していることが観察できる。

意味の側面から見ると、「空き巣」「流れ星」のような後部要素の名詞の表す事物は今現在、動詞の表す状態・動きにあるといった用例が最も多い。また、「濡れ縁」「壊れ物」が意味する「常に濡れている」「よく壊れる、壊れやすいもの」のような、今現在動詞の表す状態になくとも、常にその状態にある、あるいは動詞の表す状態になりやすい性質を持つといった解釈ができる用例も少なくない。さらに、「泣き女」のような用例もある。「泣き女」は「葬式の際に雇われて大声で泣く役目の女」（デジタル大辞泉より）の意味である。「泣くことを仕事とする女」と理解しても差し支えない。泣くことが一種の目的であって、結果的に、「女」が「よく泣く」「常に泣く」ということである。一見特殊な用例のように見えるが、本質的に、(2)の他の類と一緒である。

(2)の類は主体（後部要素の名詞の表す事物）が複合名詞の構成要素として現れているため、「主体が出現するタイプ」と名付ける。さらに、動詞の表す動作・状態の内実を見ると、動詞の動作・状態は進行中・継続中または、習慣化された動作である必要がある。

4.3 ガ格の格関係が成立しない類

この類は以下のような用例がある。

- (3) 寝顔、寝床、寝息、寝言、寝癖、生き甲斐、生き癖、乗り心地、燃え滓、座り胼胝、出口、浮き輪、跳び箱、泣き面、逃げ足、死に顔、立ち位置、散り姿、揺れ具合、鳴き声、上り調子、眠り薬、滑り台、焦げ跡、揺れ幅、抜け殻、死に金

(3) の類は膨大な用例集団を持つ。前部要素と後部要素の意味関係も多様である。しかし、すべての用例に共通して観察できるのは、前部要素と後部要素の間にガ格の格関係が存在しないことである。以下は (3) の類をさらに細分し、4.3.1 節から 4.3.5 節まで詳しくその語構成を見ていく。

4.3.1 ガ格の格関係が成立しない類その 1—主体の所有物を表すグループ

4.3.1 の用例は以下のようなものがある。

- (4) 寝顔、寝首、寝耳、泣き面、泣き目、死に顔、逃げ足、困り顔、飛び足、生き血、呆れ顔、遊び心、生き肝、驚き顔、戻り足、疲れ顔、困り顔

(4) のすべての用例は前部要素と後部要素の間には、ガ格の格関係が存在しないことが分かる。例えば、「寝顔」は「顔が寝ている」や「泣き目」は「目が泣いている」という解釈は不自然である。あくまでも「顔」や「目」の持ち主である人間（他の動物）が動詞の表す動きをしている、またはその状態にあるという解釈になる。「顔」「目」の持ち主が複合名詞の構成要素として現れていないことが、(2) の類と最も大きな違いである。このタイプのことを「主体が隠れるタイプ」と呼ぶ。動詞の表す動作の内実を見ると、やはり隠れている主体は動作の進行中、あるいは結果状態の継続中にある必要がある。また、前部要素の動詞が非能格動詞の場合、基本は動作が進行中ではあるものの、ごく稀に、隠れている動作主が動詞の表す動作を行いたいまたは行おうべきであるという意志性を持つ場合もある。「遊び心」がその例である。

「隠れる主体」と後部要素の名詞の関係を見ると、後部要素の名詞が主体の身体部位など、主体の所有物であることがほとんどである。

4.3.2 ガ格の格関係が成立しない類その2—動作・状態を具体化するグループ

4.3.2の用例は以下のような用例がある。

- (5) 歩き姿、枯れ色、枯れ姿、散り時、散り姿、生まれ故郷、生まれ年、売れ時、勝ちタイム、死に時、立ち姿、上がり調子、別れ際、生え際、揺れ具合

(5)のグループは(4)のグループと同じく、前部要素と後部要素の間には、ガ格の格関係が存在しないことが分かる。例えば、「歩き姿」は「歩く姿。歩くときの様子」²の意味で、「生まれ故郷」は「生まれた土地。ふるさと。郷里。生まれ在所」の意味である。その背後には共通して「隠れている主体」が存在している。

前部要素の動詞に注目すると、動詞が状態を表す場合、状態（結果状態を含む）が継続中である必要がある。一方で、動詞が動作を表す場合、基本は動作の進行中である必要があるが、起動相（「生え際」）、結果相（「勝ちタイム」）、完結相（「生まれ故郷」）などアスペク的な要素全般が関わる。また、(4)と同様に、非能格動詞の一部は、動作主の意志を反映し、何かを行うのに適している意味合いが含まれる場合もある（「死に時」）。後部要素の名詞を見ると、そのほとんどは「様子」「時」「場所」などを表す名詞である。(5)のグループは全体的な特徴としては、主体の動作・状態を具体化するものである。

4.3.3 ガ格の格関係が成立しない類その3—産物を表すグループ

4.3.3の用例は以下のようなものがある。

- (6) 抜け殻、寝癖、生き甲斐、歩き心地、寝言、寝汗、焦げ跡、燃え滓、座り胼胝、割れ口、乗り味、揺れ幅、燃え跡、切れ端、折れ目、焦げ目、切れ間

(6)の用例の前部要素の動詞の動作と後部要素の名詞の表す事物を時間軸で見ると、後部要素の名詞は最初から存在している事物ではない。前部要素の動詞の動作が進行している途中、または、進行した結果、後部要素の名詞の表す事物が生成される

² 本稿の語釈は、出典を明示しない場合、すべて『日本国語大辞典 第二版』によるものである。

という解釈になる。例えば、「寝汗」は「眠っている間にかく汗」（『デジタル大辞泉』20210527版）の意味で、「燃え滓」は「燃焼したあとに残るもの」の意味である。二つの例に共通しているのは、「寝る」の動作を行う人と、「燃える」の「元」となるモノの存在が必要である。これらの要素は複合名詞の構成成分として出現しないため、「主体が隠れるタイプ」に属する。

(6) のグループの特徴をまとめると、前後項の間の時間的な前後関係を持つ上に、「隠れている主体」の存在が必要である。

4.3.4 ガ格の格関係が成立しない類その4—定着を表すグループ

4.3.4の用例は以下のようなものがある。

- (7) 寝癖、逃げ癖、歩き癖、生き癖、泣き癖、濡れ性、上がり性、冷え性、遊び事、眠り病、頑張り屋、締め屋

このタイプの用例の数は少なく、しかも後部要素の名詞は「癖」「性」「屋」などに固定されている場合がほとんどである。理由を考えると、「定着を表すグループ」の分類は習慣化されたものが求められている。ある動作が長期間且つ頻繁に行われない限り、「定着」ということはできない。「癖」と「性」などの言葉は、「習慣化したもの」または「習性」などの意味合いが含まれているため、前部要素と結合しやすい側面を持つことが考えられる。

「寝癖」は4.3.4の分類に該当する意味は「寝ている間に動いて、布団や敷布を乱すくせ。つい寝てしまうくせ。寝てばかりいるくせ。寝つくに際してのさまざまな習慣」である。いずれの語釈も、「寝る」という行為が行われるたびに、主体があるきまりきった行動や無意志的な行動をとる（または、その行動は常に同じ結果をもたらしている）という点で共通し、それが一つの「癖」として定着している。

(7)の動作の特徴をみると、前部要素の動詞は動作を表すとき、繰り返される動作である必要があるし、状態を表す場合、常時の状態である必要がある。そして、そういった動作をする動作主、またはそういった状態に常にいる対象は複合名詞の構成要素として出現しないことから、「主体が隠れるタイプ」に分類される。

4.3.5 ガ格の格関係が成立しない類その5—目的・道具を表すグループ

4.3.5の用例は以下のようなものがある。

- (8) 出口、逃げ口、乗り場、滑り台、寝床、寝穴、立場、遊び部屋、下り坂、逃げ道、住み場所、跳び箱、飛び板、切れ物、浮き輪、浮板、死に金、遊び女、立ち席、立ち棒

(8) の用例の動詞と名詞の意味関係を見ると、前部要素の動詞の表す動作を実現するために、後部要素の名詞の表す事物が用いられる。または、名詞の表す事物は動詞の表す動作を実現するためにあるように解釈できる。例えば、「寝床」は「寝るための床。寝場所」の意味で、「床」の存在する目的は「寝る」ためである。「死に金」は複数の意味を持つが、ここでは「死んだ時の用意のために貯えた金」の意味に注目し、やはり一種の道具であることが分かる。

(8) のすべての用例は「VのためのN」のようにまとめられる。また、前部要素の動詞が後部要素の名詞の用途、目的への説明であって、今まで紹介された類と違って、動詞の表す動作は必ずその場で行われる必要はない。例えば、「出口」は「外へ出る口」、「乗り場」は「列車・電車・バス・船・タクシーなどの乗物に乗るために設けられた場所」という意味である。あくまでも「出る」「乗る」という行為を想定した際の行われた場所との意味であって、動詞の表す動作を実際に行うか否かに関わらず複合名詞として成立する。従って、「主体が隠れている」というよりも、「主体が関与しないタイプ」として捉えたほうが妥当である。

5. 行為・出来事を表す VN 型複合名詞の意味構成

4 節で取り上げた複合名詞の一部は行為・出来事を表すことができる。ここでは、4 節に挙げられた複合名詞に「をする」を後接させることによって、行為・出来事を表せるかどうかを判断する。その結果、「をする」を後接することができる複合名詞は行為・出来事を表せる複合名詞として、さらに以下のように分類できると考える³。

(ア) 動詞の表す動作が進行中に名詞の表す動作が行われるタイプ (5.1 節)

(イ) 動詞と名詞がそれぞれ独立した動作を表すタイプ (5.2 節)

³ 5 節で言う行為はあくまでも、一部の複合名詞はモノだけではなく、行為としても解釈であるという考えに基づいて分類である。また、先行研究でいう複合名詞は「連体修飾構造の凝縮」である(奥津：1975)との主張に対し、5 節の行為類の中の一部、例えば、「歩きスマホ」は「連体修飾構造」として理解されるよりも「トキ節」「ナガラ節」のような副詞節と主節の目的語との修飾関係の「凝縮」として捉えたほうが実際の意味に近いとの意図も含めて施された分類である。

(ウ) 名詞の表す動作が動詞の表す動作への働きかけであるタイプ（5.3 節）

5.1 動詞の表す動作が進行中に名詞の表す動作が行われるタイプ

このタイプは以下のような用例がある。

- (9) 寝小便、寝物語、立ち作業、立ち仕事、立ち話、立ち稽古、立ち産、立小便、泊まり勤務、座り仕事
- (10) 寝タバコ、寝ヨガ、歩きタバコ、歩きスマホ、添い乳

(9) と (10) で挙げた用例はすべて行為を表している。しかも、すべての用例は前部要素である動詞の表す動作が進行中、またはその動作が継続している状態の中に、後部要素である名詞の表す行為が行われるという点で共通している。しかし、後部要素の名詞に注目すると、(9) と (10) の後部要素の名詞は違う性質を持っている。

(9) の場合は、後部要素である名詞はすべて動作性名詞である。例えば、「寝小便」は「睡眠中に無意識にする小便」、「立ち仕事」は「立ってする仕事。立ったままでする作業」の意味で、「小便」も「仕事」も動作性名詞である。一方、(10) の場合、例えば、「寝タバコ」は「寝床で煙草を吸うこと。寝ながら煙草を吸うこと」を意味する。「歩きスマホ」は「スマホ（スマートフォン）を使いながら歩くこと」（『デジタル大辞泉』）の意味である。後部要素はモノ名詞である。しかし、ここで言うモノ名詞は 4 節で紹介したモノ名詞とはまた違う。4 節のモノ名詞は、例えば、「寝床」の「床」や「浮き袋」の「袋」など、モノのみを指している。これに対し、本章で取り上げている複合名詞の場合は、後部要素のモノ名詞が、モノそのものではなく「タバコを吸う」「スマホを操作する」など、行為を含意している。

このタイプは前後項の動作は同じ動作主によるものがほとんどである。二つの動作が並行して行い、「ながら」などの接続助詞を介して結び付けることができる。

5.2 動詞と名詞がそれぞれ独立した動作を表すタイプ

このタイプに該当する用例は以下のようなものがある。

- (11) 寝化粧、飛び入学、死に化粧

「寝化粧」は「寝る前にする化粧」の意味で、「飛び入学」は「小中高校の児童・生徒が最終学年を履修せずに上級学校へ進学する制度」のことである。後部要素の「化粧」と「入学」が動作性名詞であることは5.1節で取り上げた複合名詞と同じである。しかし、5.1節で挙げた用例すべて「前部要素の動詞の表す動作の進行中、または状態の継続中に後部要素の動作が行われる」という解釈で説明でき、その代表的な特徴としては「ながら」などの接続助詞で結び付けられることである。それに対して、5.2節の用例は「寝る」と「化粧」、「飛ぶ」と「入学」は時間的な前後関係を持ち、「ながら」などの接続助詞によって結び付けることは不可能である。よって、前部要素の表す行為と後部要素の表す行為はそれぞれ独立した行為と見なすべきである。

5.3 名詞の表す動作が動詞の表す動作への働きかけであるタイプ

このタイプに該当する用例には以下のようなものがある。

- (12) 暮らし応援、疲れ予防、泣きまね、悩み解消、悩み相談、痛み治療、
抜け防止、冷え予防、汚れ防止

(12)に挙げた用例は前後項ともに動作を表している。しかも、後部要素である名詞は前部要素である動詞の表す動作に対する何らかの働きかけを表している。例えば、「暮らし応援」は暮らすことを応援する意味で、「疲れ予防」は疲れることを予防する意味である。前部要素である動詞の表す動作はすべて後部要素である名詞の働きかけの対象である。従って、前後項の間にヲ格の格関係が成り立つことが分かる。一方で、ヲ格をとることから、前部要素は動詞の連用形として理解されるよりも、名詞として解釈したほうが妥当である。また、複合語として認めるかどうかは、複合語の後部要素の最初の音節にアクセントを置くかどうかによって判断されることがあり、その判断も語によって、人によって、かなりのゆれがあることも事実である。本稿はあくまでも、このような構成を持っている「動詞連用形+名詞」型複合名詞もあることを主張したい。「自動詞連用形+名詞」型複合名詞全体を見渡すと、5.3のグループはやや特殊であることは確実である。

6. 「自動詞連用形+名詞」型複合名詞の全体図と各分類の分布

6.1 分類の整理

本稿の用いられる主体の関与度と動作・状態の内実という二つの視点から、各分類を以下のように整理することができる。

表 1 分類整理表

	大分類	ガ格	主体の関与	動作・状態の内実	対応分類
自 V N 型 複 合 名 詞	モノとその周辺の類	有	主体出現	動作進行中・状態継続中 (結果状態継続含む)	4.2 主体出現
		無	主体隠れ	動作進行中・状態継続中 (結果状態継続含む)	4.3.1 所有物 4.3.2 具体化
				時間的前後関係 (前部→後部)	4.3.3 産物
				動作繰り返す必要がある	4.3.4 定着
		主体関与しない	—	4.3.5 道具	
	行為類	無	主体隠れまたは関与しない	動作・状態の中の行為	5.1 節
				それぞれ独立した行為	5.2 節
				後部が前部への働きかけ	5.3 節

6.2 分類の分布

各分類の分布は以下の図1の示す通りである。

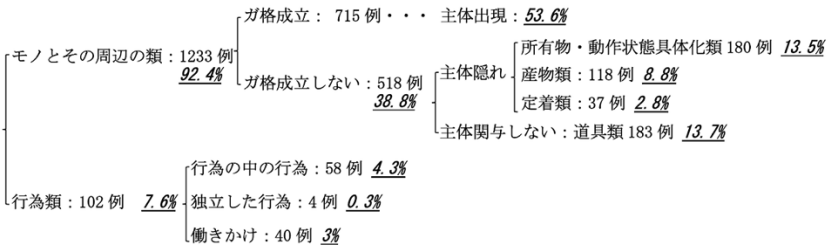
図 1 分類分布図⁴

図1が示すように、「自動詞連用形+名詞」型複合名詞の9割以上がモノ名詞及びモノの様態などを表す名詞である。また、「自動詞連用形+名詞」型複合名詞の中、行為を表せる複合名詞も少なからず存在している。モノ類の内訳を見ると、約半分の

⁴ パーセンテージは総用例数 1335 例に対するパーセンテージである。

複合名詞はガ格が成立する類、すなわち前部要素の表す動きまたは状態は、後部要素の名詞の表す事物の動き・状態である。さらに、ガ格が成立しない用例の3割以上が、主体の所有物、または主体の動作が行われた場所・時間・様子を含む動作・状態を具体化する複合名詞である。特に身体部位の場合、一部の用例で後部要素の名詞の意味拡張が見られた。例えば「疲れ顔」「死に目」のような本来感情を持たない名詞は、本稿ではガ格が存在しない類に分類されたが、日常会話中、「顔が疲れている」「目が死んでいる」のように、顔と目が示した表情・状態を指すときガ格が成り立つこと、また非能格動詞・非対格動詞によってはその容認度に差異があることなどにも注目していきたい。

7. 終わりに

本稿はこれまでの先行研究では扱われていない「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞の構成要素間の多様な意味関係に注目し、「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞の分類を行った。まず、複合名詞そのものが何を表しているかによって、「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞を、モノとその周辺の類と行為・出来事を表す類に分類した。さらに、主体と構成要素の関係及び動詞の表す状態・動きの内実によって、大分類に下位分類を施した。本稿の分類によって、「自動詞連用形＋名詞」型複合名詞における前後項要素の意味関係がより明確に示されることができた。しかし、収集した用例の中には「死に黒子」「晴れ男」のような生産性が見られない用例もあり、これらの処理はまだ十分ではない。これらの用例への考察は、今後、「他動詞連用形＋名詞」型複合名詞の分析と比較するときに行いたいと思う。

付記・謝辞等

本稿は令和元年度、埼玉大学教養学部提出した卒業論文に加筆・修正を加えたものです。本研究の全般にわたり、多大なるご指導を賜った先生方、並びに学部・院生の方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 石井正彦 (1986) 「複合名詞の語構造分析についての一考察 —学術用語を例に—」『国語学』144, pp.110-105, 国語学会.
- 石井正彦 (2007a) 「複合語の形成と「意味表示の二重性」—複合語形成論における「くみあわせ性」と「ひとまとまり性」」『月刊言語』36-8, pp.50-59, 大修館書店.
- 石井正彦 (2007b) 『現代日本語の複合形成論』ひつじ書房.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『英語学モノグラフシリーズ 16 語の仕組みと語形成』研究社.
- 沖久雄 (1983) 「複合名詞の意味と構文」『日本語学』2-12, pp.48-57, 明治書院.
- 奥津敬一郎 (1975) 「複合名詞の生成文法」『国語学』101, pp.48-37, 武蔵野書院.
- 影山太郎 (1993) 『日本語研究叢書 文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (1999) 『日英語対照による英語学演習シリーズ2 形態論と意味』くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 金恵珍 (2016) 「日本語「V+N」型複合名詞の動作性に関する研究」『言語文化』34, pp.111-126, 韓国日本言語文化学会.
- 洪栄珠 (2011) 「複合名詞の意味と形態—日本語と韓国語を中心に—」『日本言語文化』20, pp.308-322, 韓国日本言語文化学会.
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』ひつじ書房.
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』角川書店.
- 嶋田裕司 (2000) 「日本語の複合名詞による認識のタイプ」『群馬県立女子大学紀要』21, pp.21-34, 群馬県立女子大学.
- 陳奕廷 (2017) 「基底と精緻化から見た複合語の分類—日本語複合動詞を中心に—」『国立国語研究所論集』13, pp.25-49, 国立国語研究所.
- 鄭汀 (2012) 「動詞連用形+名詞」の複合名詞における動詞の「スル/シタ」形『Scientific approaches to language』11, pp.183-195, 神田外国語大学言語科学研究センター.
- 西尾寅弥 (1965) 『口語文法講座 6 用語解説編』pp.360-361, 明治書院.
- 野田大志 (2011) 「「他動詞連用形+具体名詞」型複合名詞の意味形成」『日本語の研究』7-2, pp.1-8, 日本語学会.
- 文慶喆 (1997) 「複合動詞における語構造分析の試み—構成要素「たてる」を中心に—」『言語科学論集』1, pp.99-109, 東北大学.
- 森田良行 (2008) 『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版.
- 湯本昭南 (1977) 「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27, pp.31-43 東京外国語大学.

由本陽子 (2016) 「日本語複合名詞の意味解釈メカニズム」 『言語文化共同研究プロジェクト』
2015, pp.79-88.

辞書類

- 大辞泉編集部 (編) (20210527 版) 『デジタル大辞泉』小学館.
北原保雄 (編) (2021) 『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店.
小泉保ほか (編) (1989) 『日本語基本動詞用語辞典』大修館書店.
松村明 (編) (2006) 『スーパー大辞林 3.0』三省堂編修所.
日本国語大辞典第二版編集委員会ほか (編) (2000) 『日本国語大辞典 第二版』小学館.
山田忠雄ほか (編) (2011) 『新明解国語辞典 第七版』バージョン 1.3.2, 三省堂.

用例出典

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (中納言 2.4.5) , データバージョン 2021.03, 2021.
『コトバンク』 20190304 版, 最終閲覧日: 20191109 (<https://kotobank.jp/>) .
『三省堂新明解国語辞書』 (第七版, デジタル) , 山田忠雄ほか編, バージョン 1.3.2, 2011, 株式会社三省堂, 2021.
『筑波ウェブコーパス』 NLTver.1.40, 20210316 筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所
『NINJAL-LWP for TWC』 (<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>) , 2021.

オウ シン／人文社会科学研究群
(2021年9月9日受理)